

## スポーツ行動の継続化とその要因に関する研究（1） ： 婦人テニス教室参加者の場合

金崎, 良三  
Institute of Health Science Kyushu University

徳永, 幹雄  
Institute of Health Science Kyushu University

藤島, 和孝  
Institute of Health Science Kyushu University

岡部, 弘道  
Institute of Health Science Kyushu University

他

<https://doi.org/10.15017/515>

---

出版情報：健康科学. 11, pp.71-85, 1989-03-31. Institute of Health Science, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

## スポーツ行動の継続化とその要因に関する研究 (1) — 婦人テニス教室参加者の場合 —

金 崎 良 三   徳 永 幹 雄   藤 島 和 孝  
岡 部 弘 道   橋 本 公 雄

A Study on Continuation of Sport Behavior and its Determinants (1) : Concerning  
the Participants of Tennis School for Housewives

Ryozo KANEZAKI, Mikio TOKUNAGA, Kazutaka FUJISHIMA  
Hiromichi OKABE and Kimio HASHIMOTO

### Abstract

The tennis school for housewives sponsored by Kyushu University was held for three months in 1985. This study was carried out for the purpose of clarifying how the participants of this school have been continuing tennis for these two years and what kind of factors have influenced on that. The number of subjects in this study were 36. Two kind of investigations were conducted to them by questionnaire method and interview one from 1985 to 1987.

The results would be summerized as follows :

1. All of the subjects were married women and were from 30s to 40s years of age. The majority of them were housewives who have no occupation.
2. Many of the subjects had their own sport experiences in the past. And, the greater part of them have husbands and children who are playing some kind of sport at the present.
3. There are five kind of persons or patterns concerning continuation of tennis after the school. They are, (1) the persons who have been continuing tennis all the time after the school, (2) the persons who began to play tennis from some period after the school, (3) the persons who had been playing tennis after the school and discontinued it for some period, and then began to play it again, (4) the persons who had been playing tennis for a given of period after the school and then discontinued it completely, and (5) the persons who have never played tennis at all after the school. The first one is the most in number among these five patterns.
4. There are three kind of patterns about socialization into tennis from the perspective of difference of sport experience in the past. They are, (1) the persons who had not any sport experience in the past and played tennis for the first time in the school, (2) the persons who had some kind of sport experience in the past and played tennis for the first time in the school, and (3) the persons who had tennis experience in the past. There are no distinctive relation between these patterns and continuation of tennis after the school.
5. 72.2 % of the subjects have been continuing tennis till now. Eight factors for continuation of it can be pointed out. Namely, they are, having spare time, possibility of using tennis court, having

friends for playing tennis, proper expenditure on tennis, improvement in skill, having family members who function as significant others, high behavioral intention and normative belief toward significant others, and good sport consciousness.

6. It can be said that the purposes of continuation of tennis are, social intercourse with friends, dissolution of stress, keeping health, prevention of obesity, improvement in skill and participation into tennis match.

7. 27.8% of the subjects discontinued playing tennis entirely after the school and some of the other subjects also discontinued it for a while temporarily. We can point out some factors which explain discontinuation of tennis through them. They are, (1) restriction of spare time arising from the problems on beginning new job, infant rearing and having other social role, (2) change of geographical and social environment by means of removal, (3) reasons on health condition such as ill or injury, (4) disorganization of tennis group by lack of leader or coach, (5) problem on human relation, and (6) falling of will to play tennis caused by lower level of skill.

(Journal of Health Science, Kyushu University, 11: 71-85, 1989)

## 研究目的

近年、何らかの理由でスポーツを始める人の数は増加してきているが、他方長期的にみれば一度始めたスポーツからドロップアウトする人もいる。スポーツは、個人の生活の中に取り入れられて長期的、継続的に行われることによって、健康・体力の維持増進や生活の質の改善にも役立つものである。長寿社会を急速に迎えようとしているわが国にあっては、運動やスポーツをいかに生活化し、継続していくかは重要な課題であり、この点に関する研究の必要性も高まってきている。

かつて金崎ら<sup>4)</sup>や塚本ら<sup>20)</sup>は、スポーツ教室参加者を対象にその後のスポーツ実施状況を追跡調査したが、これらはスポーツ教室の効果あるいは有効性を評価しようとしたものであり、スポーツ行動の継続化の視点に立った研究とはいえない。また、荒井ら<sup>1)</sup>、金崎ら<sup>5),6)</sup>、桑野ら<sup>8)</sup>、永吉ら<sup>10)</sup>、丹羽ら<sup>11)</sup>、多々納ら<sup>13)</sup>、徳永ら<sup>15),16)</sup>は、社会学ないしは社会心理学の立場から人びとがスポーツとかかわりをもつようになる過程の分析やスポーツ行動を規定する要因の分析を行っているが、これらはスポーツ行動の継続化に関する研究とは必ずしも一致するものではない。例えば徳永ら<sup>17)</sup>は、スポーツ行動の予測モデルを構築し、それがスポーツの実施・非実施やスポーツクラブ所属などの予測と説明には有効であることを検証したが、スポーツ行動が長期にわたって継続されるかどうかについての説明に有効かという点までは追求していない。いずれにせよ、スポーツ行動の継続化の研究は今後の課題といつてよい。

そこで本研究は、九州大学公開講座「婦人テニス教室」の参加者を対象にして、教室終了後2年間にわたって参加者がどのようにテニスとかかわってきたのか(継続状況)、テニスとのかかわり方にいかなるパターンがみられるのか(継続パターン)、そしてその背景にはどのような要因が働いているのかについて明らかにしようとしたものである。

## 研究方法

### 1. 調査の概要

#### (1) 対象

調査対象は、昭和60年度九州大学公開講座「婦人テニス教室」(昭和60年9月～12月の3ヶ月間、1回2時間、週2回、計24回実施)に参加した家庭婦人である。教室参加者は当初44名であったが、その後夫の転勤や引越し等による連絡先不明者が8名であったため、最終的な対象者数は36名となった。

#### (2) 調査の種類と時期

昭和60年9月、61年9～10月、62年10月の計3回にわたって徳永ら<sup>18)</sup>が開発した「スポーツ行動診断検査」を、そして62年11～12月に「テニスの継続化についての調査」を実施した。なおこの他に、九州大学健康科学センターが作成した「健康度と生活形態についての調査」も実施したが、本稿では触れないことにした。

#### (3) 調査方法

「スポーツ行動診断検査」は、1回目と3回目は主として対象者に直接検査票を配布し後日回収した。その際、一部は郵送法を併用した。2回目の調査は、すべて郵送法で実施した。「テニスの継続化についての調

査」は、面接法で行った。面接時間は、1人20分～30分であった。なお、転居者や都合で面接できなかった者については、電話による聞き取り調査を実施した。

#### (4) 調査内容

「スポーツ行動診断検査」は、個人のスポーツ意識とスポーツ条件の診断やこれらの結果とスポーツ実施状況等の関連を調べるのが主な目的であるが、今回はスポーツ意識(態度、信念、規範信念)の変化についてみることにした。「テニスの継続化についての調査」は、実態の数量的把握というよりは質的側面を重視した調査であり、その内容は対象者の基本的特性、本人および家族のスポーツ経験、テニスの継続状況、試合出場経験、クラブ所属の有無、テニス技能の向上度、テニス関係支出、テニス教室の効果、テニスのための条件、今後のテニスとのかかわり方、テニスの行動意図、規範信念、テニス継続の契機・目的・問題点、テニス非継続の理由、その他から構成されている。

#### 2. データの分析

本稿の場合、サンプル数が少ないためと個人個人の事例を丹念に追跡する必要があるため、調査結果はすべて手集計で処理した。すなわち、生のデータを個人別に整理しそこから行動や意識その他に関して一定の傾向やパターン、特徴を読み取るようにした。なお調査結果は、本文と重複する部分を除いて巻末に付表として掲載した。

### 結果と考察

#### 1. 対象者の基本的特性

まず対象者の年齢は、昭和62年調査時で30代63.9%、40代36.1%と30代～40代に限られており、平均年齢は38.6歳である。結婚に関しては、全員が既婚者でありそれぞれ家庭をもっている。職業については、「自営業手伝い」が2.8%、「パート」で職業に就いている者が25.0%いる程度で、あとの大部分(72.2%)はいわゆる専業主婦である。子供の数は、「2人」が75.0%と大部分を占めており、次いで「3人」13.9%、「1人」5.9%、「なし」5.9%となっている。平均1.97人である。末子の年齢をみると、「小学校就学前」17.6%、「小学生」52.9%、「中学生以上」29.4%であり、小学生の子供をもつ者が多い。ライフサイクルからみると、ほとんどの者が出産・育児から解放された時期にある。

#### 2. 本人および家族のスポーツ経験

対象者のうち、学生時代(中学・高校・大学)に体育の授業以外でスポーツの経験があるという者は47.2%と約半数であった。また、学校卒業後からテニス教

室に参加するまでの間にスポーツ経験があるという者は69.4%であった。テニスの経験が少しでもあるという者は全体の44.4%であり、ほとんどの者が学校卒業後に始めている。反面、学生時代から教室に参加するまでにスポーツ経験のない者は13.9%と少なかった。すなわち、今回のテニス教室の参加者は過去においてスポーツ経験のあった者が多いということである。徳永ら<sup>14)</sup>も、かつて家庭婦人を対象にした公開講座スポーツ教室の参加者は過去においてその種目のクラブ経験者が多く、経験のない者は極めて少なかったと同様な報告をしている。

次に、夫の場合をみてみよう。学生時代にスポーツを経験したという夫をもつ者は69.4%であり、そして現在夫が何らかのスポーツを実施しているという者は83.3%に達している。過去も現在もスポーツとはかかわっていないという者は僅か1名(2.8%)にしか過ぎない。また子供に関しては、全員が何らかのスポーツをしているという者は55.9%、全員ではないが誰かが実施しているという者は41.2%で合計すると97.1%にもものぼる。つまり、スポーツとかかわりをもつ夫や子供がいる者が極めて多いといってよい。スポーツにかかわりをもつ家族の存在は、本人がテニス教室に参加するにあたって少なからず影響を及ぼしたものと考えられる。

#### 3. テニスの継続パターン

図1は、テニス教室終了後の昭和60年12月から2年間にわたるテニスの継続状況と平均実施回数を個人別に示したものである。実施程度は週1～3回程度の者が多い傾向にあるが、継続状況に関しては次の5つのパターンがみられる(表1)。

- ①長期継続型・教室終了後から引き続きずっと継続している者。
- ②中途継続型・教室終了後しばらくは実施せず、途中から開始して現在も継続している者。
- ③中断継続型・教室終了後から引き続き実施していたが途中で中断の時期がある。しかし再び開始して現在も継続している者。
- ④中途非継続型・教室終了後から引き続き実施していたが、途中でドロップアウトした者。
- ⑤長期非継続型・教室終了後からずっと実施していない者。

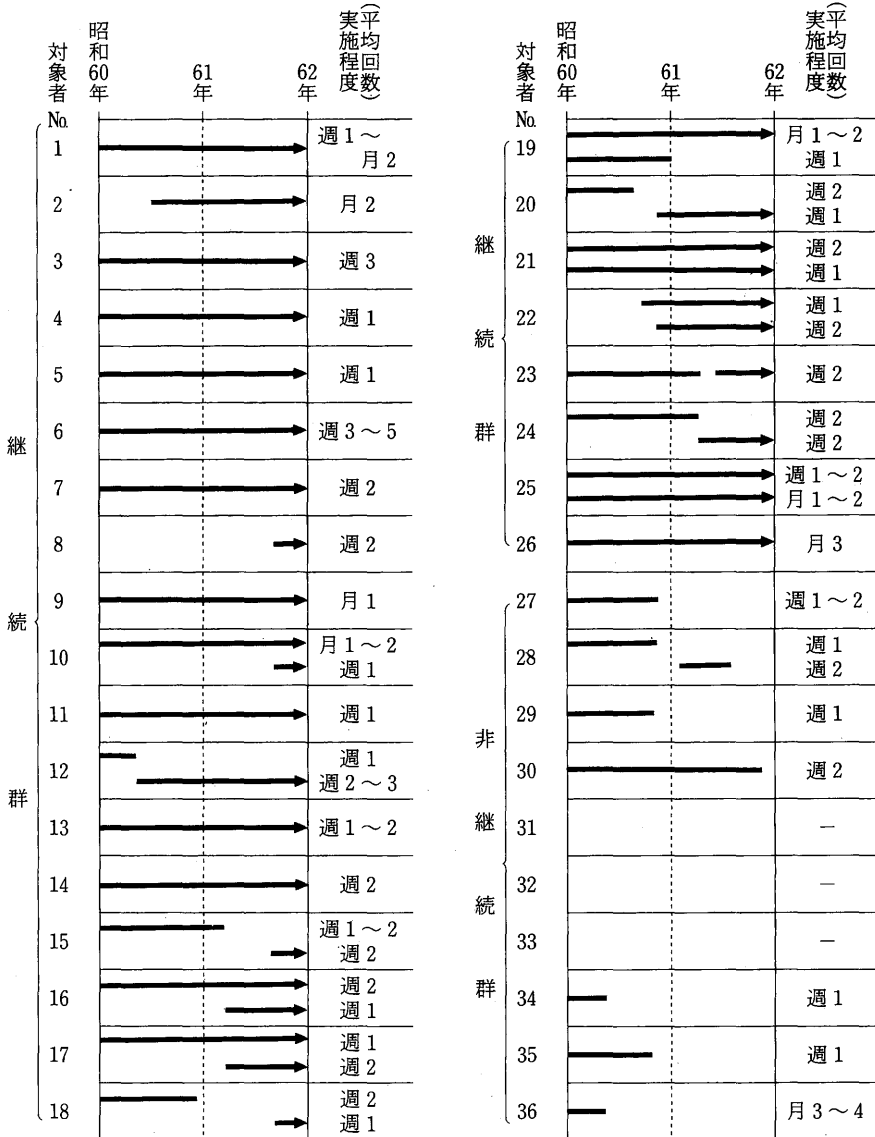
以上のうち、①～③は継続群、④～⑤は非継続群である。最も多くみられたのは長期継続型であり、次いで中断継続型、中途非継続型、中途継続型、長期非継続型の順となっている。長期継続型の特徴をみると、

年代は30代が多く、全員が過去または現在においてスポーツとかかわりのある夫と子供をもっている。また、練習コートが自宅から極めて近い所にあり、試合に出場した者が多いという傾向がみられる。その他のパターンに関しては、サンプル数の関係上これといった特徴を指摘するのは困難である。ここでは、継続パターンの存在のみを指摘するにとどめたい。全体的には継

続群が7割以上を占めており、テニス教室が直接的要因とはいえないとしても、テニスの継続化という教室の1つの目標達成に関しては評価されてよからう。

4. テニスへの社会化パターン

次に、テニスの継続群について過去のスポーツ経験によるテニスへの社会化のパターンについてみてみよう。テニスへの社会化とは、厳密にいえばテニスの技



- ※(1) ラインの部分が継続してきたおよその時期である。
- (2) ラインの矢印は現在も継続中であることを示す。
- (3) 2本のラインがあるところは2ヶ所で継続してきたことを示す。

図1 テニスの継続状況と実施程度

表1 テニスの継続パターン

区分	型	継続状況	該当者No	N	%
継続群	長期継続型	教室終了後からずっと継続	3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 13, 14, 16, 17, 19, 21, 25, 26	15	41.7
	中途継続型	教室終了後実施せず, 途中から継続	2, 8, 11, 22	4	11.1
	中断継続型	教室終了後実施, 一時中断の後再び継続	1, 12, 15, 18, 20, 23, 24	7	19.4
非継続群	中途非継続型	教室終了後実施, 途中で中止	27, 28, 29, 30, 34, 35, 36	7	19.4
	長期非継続型	教室終了後からずっと実施せず	31, 32, 33	3	8.3

\*N=36

表2 過去のスポーツ経験によるテニスへの社会化パターン

群	型	学生スポーツ時代の経験	テニス参加以前の教室の経験	教室参加による継続	テニスの継続	該当者No	N	群合計	%
A	a	なし	なし	初めて開始	長期継続型 中途〃 中断〃	1, 2, 3	3	7	26.9
	b	あり	なし	初めて開始	長期継続型	4, 5, 6, 7	4		
B	c	なし	あり(テニス以外)	初めて開始	長期継続型 中途〃	8, 9, 10, 11	4	6	23.1
	d	あり	あり(テニス以外)	初めて開始	長期継続型 中断〃	12, 13	2		
C	e	なし	テニス経験あり	再開継続	長期継続型 中断〃	14, 15, 16, 17, 18, 19, 20	7	13	50.0
	f	あり	テニス経験あり	再開継続	長期継続型 中途〃 中断〃	21, 22, 23, 24, 25, 26	6		

\*テニスの継続パターンは表1による。継続群N=26

術やルール、マナー、価値などを内面化する過程を意味するが、ここではテニス教室への参加という形式でのテニスとのかかわり方の過程を問題とした。表2は、この点を整理したものである。それによると、学校卒業後からテニス教室に参加する以前のスポーツ経験の違いから、次の3つのパターン(群)に分けられる。

①A群…教室参加以前のスポーツ経験はなく、テニス

を初めて開始した者。

②B群…スポーツの経験はあるが、テニスは今回の教室が初めてという者。

③C群…テニスの経験があり、今回の教室で再開または継続的に実施するという者。

以上のうち、最も多かったのはC群で50.0%、以下A群が26.9%、B群が23.1%であった。つまり、テニ

スの継続群の中には経験者が多い傾向にある。C群は、やはり試合に出場した経験をもつ者や、テニス技能の向上を認める者が多い。

以上の3群は、さらに学生時代のスポーツ経験の有無をクロスさせることによって、それぞれ2つの型に細分化することが可能である。すなわち全体では、過去のスポーツ経験によるテニスへの社会化はa～f型にみられるように6つのパターンが存在する。これらのパターンの特徴を考察することは困難であるが、社会人を対象としたある特定種目のスポーツ教室が開設される場合、参加者はこの6つのパターンのどれかに属する筈であり、教室終了後のスポーツとのかかわり方について考察する場合の1つの視点を提供するものといえよう。

スポーツの継続化の問題を取り上げるにあたっては、過去のスポーツ経験やスポーツへの社会化過程は無視できない重要なポイントである。過去のスポーツ経験が現在のスポーツ実施・非実施の規定要因であることは、これまで多くの研究者<sup>7),9),12)</sup>によって指摘されてきたところである。ここで過去のスポーツ経験によるテニスへの社会化パターンをみたのは、このことが教室終了後のテニスの継続パターンと関係があるのではないかと考えたわけであるが、表2に示すようにA, B, C群またはa～f型のいずれにおいても、例えば長期継続型がみられるなど、そこに特徴的な関連性は認められなかった。つまり、テニスとのかかわり方のうち実施程度や質的レベルを無視した単なる継続の仕方、パターンは、過去のスポーツ経験に影響されるということではなく、教室終了後の現在のテニスをめぐる条件や個人のスポーツ意識等により規定されると考えるべきであろう。

### 5. テニス継続化の要因

テニスという文化的行動が起こり、そして継続されるためには、いくつかの条件(要因)が整わなければならない。ここでは、継続群のデータからテニスの継続化を可能ならしめている要因を探ってみよう。

#### (1) 時間的条件

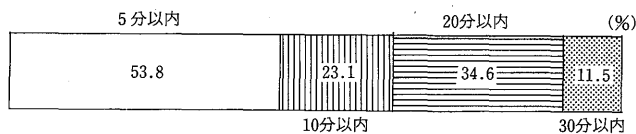
テニスのための時間は、全員が「とれる方」と答えている(付表2)。この点是对象者の基本的特性のところ全体としてみたわけであるが、継続群についても大部分は専業主婦であり、職業に就いていてもそのすべてがパートタイマーであることから、テニス実施のための時間的余裕はあるものとみてよい。

#### (2) 場所的条件

継続群である以上どこかのコートを使用しているわけであるが、使用するコートが「決まっている」という者が96.2%、「決まっていない」という者は僅か3.8%であった。そこで、自宅からテニスコートまでの所要時間を調べたのが図2である。交通の手段は、徒歩、自転車、バイク、自家用車の4種類であったが、ここでは所要時間のみを問題とした。それによると、半数以上が「5分以内」と答えており、これに「10分以内」を合計すると76.9%にもなる。全体の平均時間は、10.8分であった。つまり、大部分の継続者にとって利用できるコートがいかに身近な所にあるかが理解される。

#### (3) 仲間の条件

練習仲間についてみると、最も多いのは「クラブの人」(42.3%)であり、以下「教室参加者」(38.5%)、「スクールの人」(26.9%)、「友人」(26.9%)、「夫」(19.2%)、「近所の人」(19.2%)となっている。また練習形態を分類すると、「自主グループ」(46.2%)、「クラブ」(46.2%)、「スクール」(26.9%)、「その他」(3.8%)であった。練習仲間の捉え方には個人差があるようであるが、クラブの仲間と今回のテニス教室参加者が多いといってよい。クラブ形式で継続している者は、すべて公共施設と企業施設を利用する地域のクラブに所属している。自主グループというのは、教室終了後に参加者が自分たちで小グループをつくり、コートを確保することによって定期的に練習するという形式であり、クラブと呼ぶ程のものではない。練習に参加する人数も4～8人程度であり、教室参加者だけのグループもあれば他の仲間が加わっている場合もある。自



※(1) 継続群N=26

(2) 2ヶ所で練習する者がいるため合計は100%を越える。

図2 自宅からテニスコートまでの所要時間

主グループが使用するコートは計5ヶ所にわたっているが、そのうちでも公共施設のK公園コート(16面)を使用しているところが多い。このコートは、土曜日と日・祭日は競技会が行われたりその他で利用希望者は多いが、平日は比較的空いている状況にあり、また使用料も1コート2時間で550円と安く、自主グループのほとんどのメンバーにとって距離的にも近い所にある。このように安価で利用しやすいコートが近くに確保できるということが、こうした自主グループを生んだ大きな要因であったと考えられる。またスクール形式で継続する者も若干みられるが、これは商業施設でプログラムサービスとして行われるスクールに入会している者がほとんどであり、更新手続きをしていけば引き続き入会することができる。

以上、いずれにせよテニスを継続するための仲間の条件も十分満たされていると見てよい。特に、テニス教室を契機として参加者が自主的に練習グループを形成したことは注目される。

(4) 経済的条件

図3は、1ヶ月平均のテニス関係支出をみたものである。支出傾向には2つの山があり、一方は月額3,000円未満の者、他方は5,000円以上の者と大きく分かれる。後者の場合は、やはり商業施設でのスクールに入会している者が多い。個人別にみると、社宅のコートを利用するため支出はほとんどないという者1名を除くと、下は月額700円から上は1万円までとかなりの幅はあるが、平均すると月額約3,500円となる。かつて荒井ら<sup>2)</sup>は、社会人を対象としたスポーツ行動の実証的研究の中で、所得はスポーツ行動の実施との関連度が高くはないことを報告した。また丹羽ら<sup>12)</sup>の研究においても、経済的余裕はスポーツ参加の障害要因として上位にはあがっていない。今日、スポーツ行動を規定する要因の1つとしての経済的条件はその規定力を弱めつつあり、今回のテニス関係支出の場合もまずは大

きな負担になっているとは考えられず、この点は問題はないとみてよかろう。

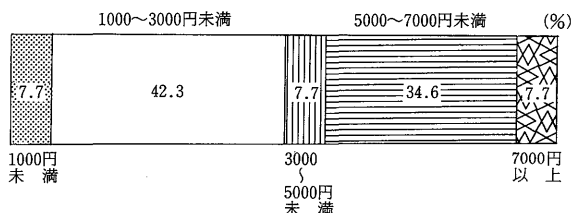
(5) テニスの技能

教室参加前と2年後を比べて、テニスの技能(腕前)がどの程度向上したかについて自己評価して貰った。継続群のうち「かなり向上した」という者は53.8%、「少し向上した」者は46.2%であり、向上しなかったというマイナスの評価をした者は皆無であった。この点、非継続群は「あまり向上しなかった」という者が10名中7名もおり、大きな違いをみせている。一般にスポーツを実施することの喜びは、1つにはそのスポーツの技術を内面化していく過程にあるといえる。技能が向上することによってテニスの面白さを味わい、このことがテニスの継続化にも繋がっているものと考えられる。

また、継続群のうちこの2年間にテニスの試合に出場した経験のある者は57.7%と半数を越えており、そして今後試合出場を希望する者は65.4%となっている。テニスの技能が「少し向上した」と評価した者は、試合経験者が少なく今後は楽しみ志向のテニスをしたい者と試合に出場したい者に分かれているが、「かなり向上した」という者の場合は明らかに試合経験者が多く、また今後も試合出場を希望する者が多い傾向にある。このように、技能の向上度はテニスとのかかわり方にも関係するといえよう。

(6) 重要な他者

重要な他者とは、スポーツへの社会化過程における主要な要因の1つであり、個人がスポーツとかかわりをもつようになる過程において影響を及ぼすところの人を指す。先にみたテニスの練習仲間もこの中に含まれるが、ここでは本人にとって最も身近な存在である家族のメンバーを問題とした。既にみたようにテニス継続群のほとんどの場合、夫や子供も過去または現在においてスポーツとかかわりをもっている。練習仲間



\* 継続群 N=26

図3 テニス関係支出 (平均月額)



の中に夫が含まれるケースも若干みられるし、また子供との関係では親から子供への影響がある反面、子供から親への影響もあろう。したがって、夫や子供がテニスを継続していく上で重要な他者としての機能を果たしていることが考えられる。

#### (7) 行動意図と規範信念

表3は、1週間以内という特定状況におけるテニスの行動意図および家族と友人に対する規範信念についてみたものである。テニスという行動は、その行動をしようとする意図（行動意図）によって予測される。調査結果をみると、継続群のほとんどが高い行動意図をもっていることがわかる。行動意図の低い者が2名いるが、そのうち1名はテニスの実施回数が月1回程度と少なく、1週間以内にテニスをするつもりはないという者であった。また、他の1名は決まって使用す

るコートがないという者であった。つまり、これらはテニスの実施状況が不定期であったり実施回数が少なかったりすることから、特定状況における行動意図が結果として低かったものと思われる。

次に規範信念は、重要な他者の期待に対する信念であり、行動を規定する重要な要因であることが知られている<sup>3)</sup>。表3によれば、家族や友人に対する規範信念の高い者がほとんどである。低い者は僅か1名であり、この1名は行動意図の低かった者のうちの1人であった。つまり、継続群のほとんどの者は家族や友人からテニスをすることを期待されていると強く感じているのである。この点非継続群の場合は、対照的に行動意図も規範信念も高いという者は皆無であり、継続群とは大きな違いがある。行動意図や規範信念が高いということは、テニスの実施を高い確率で予測することが可能であり、テニスの継続化要因になっているということができる。

#### (8) スポーツ意識

最後に、「スポーツ行動診断検査」によるスポーツ意識の判定結果についてみておこう。スポーツ意識の内容は、スポーツに対する態度(感情的側面)、スポーツの効果に対する信念および重要な他者の期待に対する信念(規範信念)から構成されている。巻末の付表3によって昭和62年調査時の判定をみていくと、信念の低い者が若干みられるが、態度と規範信念は高い者が多い。全体的にみても、態度、信念、規範信念のそれぞれの判定は高いかまたは中位である者がほとんどである。

また表4によって、この2年間のスポーツ意識の変化をみると、いずれの場合も「変化なし」という者が最も多く5～6割を占めており、次いで「高くなっ

表3 テニスの行動意図と規範信念

区分		N	%	
行動意図	高	23	88.5	
	中	1	3.8	
	低	2	7.7	
規範信念	家族	高	23	88.5
		中	2	7.7
		低	1	3.8
	友人	高	23	88.5
		中	2	7.7
		低	1	3.8

※継続群N=26

表4 2年間のスポーツ意識の変化

区分 (得点による判定)	態度		信念		規範信念		総合判定	
	N	%	N	%	N	%	N	%
高くなった	7	26.9	6	23.1	4	15.4	5	19.2
変化なし	13	50.0	14	53.8	16	61.5	15	57.7
低くなった	3	11.5	3	11.5	3	11.5	3	11.5
不明	3	11.5	3	11.5	3	11.5	3	11.5

※(1) 継続群N=26

(2) 得点による判定は「スポーツ行動診断検査」の基準に従った。

(3) 区分の「不明」は、昭和60年(第1回)または昭和62年(第3回)に調査を受けていないため変化の判断ができない者である。

た、「低くなった」の順となっている。つまり、大部分の者が変化がないかまたは上位への変化を示している。この点について非継続群の場合をみると、信念が高くなった者が3名いるものの、態度と規範信念が高くなった者は1人もみられなかった。

次に、態度、信念、規範信念のそれぞれの得点によるスポーツ意識の総合判定についてみてみよう(付表3)。総合判定<sup>19)</sup>はA～E型の5段階があり、スポーツ意識はE～A型の順で高いことを示す。その他、この5段階の中に準典型や混合型がある。全体的にE型、D型およびこれらの準典型であるE'型、D'型、DE型など上位の判定である者が多く、やや問題があるとされるB型に該当する者が1名いるのみであった。またこの2年間を通じての総合判定の変化をみると、「変化なし」が最も多く、以下「高くなった」、「低くなった」の順となっている(表4)。「変化なし」という者の内訳をみると、上位の判定が大部分であり下位の判定であった者は1人もいない。また「低くなった」という者も、全員が中位以上の変化であった。このように、継続群のスポーツ意識は高い方であり、そこに問題らしいものはなく、テニス行動との結びつきが理解される。

以上、予め仮説としてテニスの継続化要因と考えられた点について、調査結果を踏まえながら考察してきた。要約すると、第1に専業主婦がほとんどであり、また職業に就いていてもパートタイマーであることからテニスを実施するための時間的余裕があること、第2に利用できるコートが極めて身近な所にあり、その確保があまり困難でないこと、第3に自主グループやクラブ、スクールなどの形式で練習するための仲間の条件が整っていること、第4にテニスを実施するための支出が大きな経済的負担とはなっていないこと、第5にテニスの技能の向上が認められること、第6に家族が重要な他者として機能していること、第7にテニスの行動意図や重要な他者に対する規範信念が高いこと、第8にスポーツ意識に問題がないこと、などがテニスの継続化要因になっていると指摘できよう。

## 6. テニス継続の目的

表5は、テニス継続の目的、契機、実施上の問題や非継続の理由等について、面接調査の結果からその要点を個人別に整理したものである。この中からテニスを継続する目的と思われる内容を列挙すれば、①友人との交流(社交)、②ストレス解消、③健康・体調の維持、④肥満防止・体重調整、⑤技能の向上・試合出場、ということになる。これらは、テニスを実施すること

によって個人が求めていることの内容、あるいはテニスの効果に対する期待とみられ、一般にいわれるスポーツ実施の目的と異なるものではない。今回の場合、特に「上手になりたい」とか「試合に出たい、勝ちたい」など⑤の目的をあげた者が目立った。技能の向上は、先にテニスの継続化要因として指摘したわけであるが、継続目的としてもかなり重点が置かれているようである。

## 7. テニス非継続の要因

表5によって、テニスが継続されないことの要因を整理してみよう。対象となるのは、非継続群の他に中途継続型、中断継続型に属する者である。まず第1に、仕事の都合があげられる。「新しくパートの仕事を始めた」とか「家業の手伝いで忙しくなった」といった場合であり、対象者のNo27や29が該当する。第2に、出産と育児により中断せざるを得なかったといった性的役割の問題がある(No33)。第3は社会的役割の問題で、居住する地域の役員を引き受けたことにより忙しくなったという場合である(No23)。以上3つの場合は、それぞれ新たな役割を遂行する必要が生じたため、テニス実施のための時間的條件が制約されることになったものである。第4に、転居による地理的社会的環境条件の変化があげられる(No12, 18, 20, 30)。これは夫の転勤その他による転居によって、施設と仲間の条件が欠落することを意味する。もっとも、転居先で新しくクラブを探してテニスを再開した者もいるが、この点はやむをえない非継続要因といえよう。第5に、病気や怪我など健康上の理由から中断、非継続に至った者がいる。例えば「病気のため」(No1)や「貧血によって体調がすぐれない」(No28)、「教室期間中に肘を痛めてその回復が思わしくない」(No31)という者の場合である。第6に、指導者やリーダーが何らかの理由でいなくなることによってグループが解散したことがある(No34, 35)。初心者の場合、自分たちで練習していくことが困難であり、技術のコーチをしてくれる指導者なりリーダーなりの存在が必要とされることが多いようである。第7に、グループ内の人間関係の問題からテニスをやめた例がある(No36)。一般的にも、スポーツからドロップアウトする原因の1つとして、いろんな意味での集団内人間関係の問題が考えられる。第8として、テニス教室終了の時点でテニスを楽しめる程度の技術を習得するまでに至らず、引き続き実施しようという意欲が湧かないという例があげられる(No32)。この場合は、テニスをめぐる条件(コートと仲間)に恵まれているにも拘らず長期非継続型に属し

表5 テニス継続の目的・契機・非継続の理由・テニス実施上の問題

対象者	No.	内 容	対象者	No.	内 容
継 続	1	一時中断したのは病気のため、現在夫とすることが多い。	継 続 群	19	教室参加者による自主グループは練習時間の調節ができず自然消滅、上手になり試合に出たい。
	2	教室終了後7ヶ月目に誘われて現在のグループに入る。技術の向上が問題である。		20	転勤のためテニスは一時中断。転居先で自主的に現在のスクールに入った。上手になりたい。
	3	たまたま欠員が生じて現在のクラブに入る。友人との交流を得たい。		21	健康維持のため続けたい。
	4	友人の誘いでテニスを始めた。人間関係を調和させたい。		22	教室終了後7ヶ月間の中断は子供の世話などで忙しかった。その後、自主的にスクールに通い、友人のすすめでクラブにも加入した。
	5	ストレス解消、体調維持のために続けたい。		23	7ヶ月間の中断は地域の役員となって忙しくなったため。その後、再び開始した。
	6	上手になり試合で勝ちたい。		24	教室参加者による自主グループはリーダーの転居により解散。その後、友人の紹介で現在のクラブに加入した。
継 続	7	上手になりたい。	25	上手になりたい。	
	8	教室終了後は着物の着付免許を取るのに忙しくずっとできなかった。2ヶ月前、友人の誘いで現在のクラブに入った。	26	未組織、不定期に実施。コートとメンバーの確保に苦労している。次回実施予定日も決まっていない。	
	9	社宅の中にコートがあり月1回程度と回数は少ないが継続している。健康維持のため今後も続けたい。	27	教室参加者による自主グループで1年間程継続したが、パートの仕事を始めたため止めた。再開するよう友人から誘われている。	
	10	団地クラブの方はコートが手づくりの上、子供の春、夏休み中など使えないことが多い。3ヶ月前から民間のスクールに友人の誘いで入った。	28	現在、体調が悪く(貧血)、クラブは休部中である。体調が良くなればまた始めたい。	
	11	体重を減らしたい。友人から現在のクラブの存在を教えて貰い加入した。	29	自営の店を手伝うため止めた。時間的余裕ができればまた始めたい。	
	12	自主グループでのテニスを止めたのは転勤のため。転勤先でクラブに自主的に加入、上手になり試合で勝ちたい。	30	引越しや技術向上がない、パートナーが来なくなったなどの理由でクラブを退部した。	
継 続 群	13	肥満予防、体調維持のため続けたい。	31	教室期間中に肘を痛め、少し無理して続けたが、どうもよくならないため終了後はまったくしていない。	
	14	現在のクラブは教室とほぼ同じ時期に自主的に加入した。上手になり試合で勝ちたい。	32	テニスを楽しめるまでにいたらず、社宅の中にコートがあり、仲間もいるにも拘らず、おっくうでやる気がでない。	
	15	4ヶ月間テニスを中断したのは練習時間が比較的早く、家事に支障が生じるようになったため。現在は別のクラブに加入。	33	教室終了後妊娠した。その後、育児のため現在まで実施せず。	
	16	上手になりたいため、自主グループによる練習の他に民間のスクールに通っている。	34	自主グループが3ヶ月で消滅したのは、責任者(指導者)が高齢であり、都合でコートに來れなくなったため。	
	17	上手になりたい。	35	教室参加者と9ヶ月間にわたって自主的に実施してきたが、コーチする人がいなくなったため解散した。	
	18	自主グループを止めたのは引越しのため。その後時間を有効に使いたいため現在のグループに通っている。	36	他の人たちはペアで練習に参加、自分はペアができなかったので何となくやりにくくなったので止めた。現在別のスポーツを始めた。	

ており、テニスの技能と意欲という個人の側の条件に問題があるといえる。その他、例えばNo.2やNo.11にみられるように友人に誘われてクラブに加入したという場合がある。これは、クラブあるいはグループの存在を知らなかったため実施したくてもできなかったということになり、クラブに関する情報の欠如が非継続要因となっていると考えることもできる。しかしながら、この点は個人の側のテニスの欲求度あるいは意欲の問題に帰すべきであろう。つまり、この場合は個人を情報の提供を待つという受動的な存在として捉えるのではなく、情報を求めて行動することにより解決される問題と考へたい。

以上、テニス非継続の要因を8つ指摘した。健康上の理由とグループ内の人間関係の問題を別にすれば、あとは先にみた継続化要因と裏腹の関係にあることがわかる。スポーツの継続化の問題には、当然のことながらスポーツからのドロップアウトの問題も含まれる。これら非継続要因として明らかになった問題をいかに解決していくかは、単に個人の問題としてではなく社会的問題として取り組む必要がある。

## 要 約

テニス教室に参加した婦人36名を対象にして、2年間にわたる追跡調査を実施することによって、テニスの継続化をめぐる問題にアプローチしてきた。研究結果は、以下のように要約される。

1. 対象者の基本的特性については、全員が30代から40代の既婚者であり、若干の者はパートタイマーとして職業に就いているが、大部分は専業主婦である。また小学生の子供をもつ者が多いが、ほとんどの者が出産・育児から解放された時期にある。
2. 学生時代からテニス教室に参加するまでの過去において、大部分の者が何らかのスポーツの経験をしている。また、スポーツとかかわりをもつ夫や子供がいる者が極めて多い。
3. テニスの継続状況については、①長期継続型(教室終了後引き続き継続)、②中途継続型(教室終了後すぐには実施せず途中から開始して現在も継続)、③中断継続型(途中で中断の時期があるが現在も継続)、④中途非継続型(教室終了後引き続き実施していたが途中でドロップアウト)および⑤長期非継続型(教室終了後からずっと実施せず)の5つのパターンがみられた。全体的には①～③の継続群が多く、7割以上を占めている。特に長期継続群は、練習コートが自宅から極めて近い所にあり、試合に出場した経験のある者が多い

傾向がみられる。

4. テニスへの社会化パターンについては、学校卒業後からテニス教室参加以前のスポーツ経験の違いから、①テニスを初めて開始した者、②スポーツ経験はあるがテニスは初めての者、③テニスの経験があり教室では再開または継続的に実施する者、という3つのパターンがあり、このうち③のパターンに属する者が多く半数を占めている。これらのパターンと教室終了後のテニスの継続パターンとの間には、特徴的な関連性は認められなかった。

5. テニス継続化の要因としては、①専業主婦がほとんどであり、仕事をもっているがパートタイマーであることから時間的余裕がある、②利用できるコートが極めて身近な所にある、③自主グループやクラブ、スクールなど練習仲間がいる、④テニス関連支出が大きな経済的負担となっていない、⑤テニスの技能の向上が認められる、⑥家族が重要な他者として機能している、⑦テニスの行動意図や重要な他者に対する規範信念が高い。⑧スポーツ意識に問題がない、などが指摘できる。

6. テニス継続の目的に関しては、①友人との交流、②ストレス解消、③健康・体調の維持、④肥満防止・体重調整、⑤技能の向上・試合出場の5つがあげられるが、特に「上手になりたい」、「試合に出場したい、勝ちたい」など⑤に関連する内容をあげた者が目立つ。

7. テニス非継続の要因としては、①仕事の都合、②性的役割の問題(出産・育児)、③社会的役割の問題(地域の役員就任)、④転居による地理的・社会的環境条件の変化、⑤病気・怪我など健康上の理由、⑥指導者・リーダーがいなくなることによるグループの消滅、⑦グループ内の人間関係の問題、⑧テニスの技能が向上しないことによる意欲の低下、などがあげられる。

本研究は、その目的がある程度達成されたとはいえ婦人のテニスについての1つの事例研究に過ぎず、したがって以上の結論を一般化することは困難である。今後は、今回の結果を踏まえてさらに対象を拡大するなどして、数量的、実証的研究へ発展させたいと思う。(本研究の要旨は、1988年の第37回九州体育学会にて発表した。)

## 文 献

- 1) 荒井貞光, 松田泰定: スポーツ行動に関する実証的研究(2), 体育学研究, 22-3: 137-152, 1977.
- 2) 荒井貞光, 松田泰定: 前掲1), P.151.

- 3) Fishbein, M and Ajzen, I.: Belief, Attitude, Intention and Behavior: An Introduction to Theory and Research, Addison-Wesley.: Reading Mass, 1975, PP.332-334.
- 4) 金崎良三, 徳永幹雄: 大学における公開スポーツ教室の運営・指導に関する事例研究, 健康科学, 1: 127-140, 1979.
- 5) 金崎良三, 多々納秀雄, 徳永幹雄, 橋本公雄: スポーツ行動の予測因に関する研究(1) — 社会的要因について —, 健康科学, 3: 55-69, 1981.
- 6) 金崎良三, 多々納秀雄, 徳永幹雄, 橋本公雄: 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(3) — スポーツ関連要因について —, 健康科学, 4: 77-89, 1982.
- 7) 小椋 博, 影山 健: 労働要因がスポーツ参加に及ぼす影響の分析, 体育学研究, 22-5: 315-316, 1978.
- 8) 糸野 豊, 池田 勝, 山口泰雄: パス解析によるスポーツ参加の分析, 筑波大学体育紀要, 2: 23-30, 1979.
- 9) 糸野 豊, 池田 勝, 山口泰雄: 前掲8), p. 28.
- 10) 永吉宏英, 江橋慎四郎, 糸野 豊, 島崎 仁: フィジカル・レクリエーション成立を促す要因分析 — 林の数量化理論第II類を用いて — レクリエーション研究, 6: 29-39, 1977.
- 11) 丹羽劭昭, 長沢邦子: 女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討, 体育学研究, 23-2: 109-119, 1978.
- 12) 丹羽劭昭, 長沢邦子: 前掲11), P.118.
- 13) 多々納秀雄, 厨 義弘: スポーツ参加の多変量解析(I) — 数量化理論第II類による要因分析 —, 健康科学, 2: 103-118, 1980.
- 14) 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄: スポーツ教室の開設と今後の課題 — 九州大学公開スポーツ教室(テニス・バレーボール)について —, 九州大学体育学研究, 5-2: 19-20, 1974.
- 15) 徳永幹雄, 橋本公雄, 金崎良三, 多々納秀雄: スポーツ行動の予測因に関する研究(2) — 心理的・身体的要因について —, 健康科学, 3: 71-85, 1981.
- 16) 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄: スポーツ行動の予測と診断, 不昧堂出版, 1985, PP. 1-246.
- 17) 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄: 前掲16), PP.147-155.
- 18) 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄: 前掲16), PP.187-211.
- 19) 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄: 前掲16), PP.220-221.
- 20) 塚本真也, 大島 等, 大橋 広: スポーツ教室の有効性に関する基礎的調査研究, 日本体育学会第29回大会号, P.112, 1978.

付表1 テニスの継続化についての調査結果(その1)

対象者No	氏名	1.年齢	2.職業	3.夫のスポーツ経験		4.子どものスポーツ実施状況(現在)	5.学生時代のスポーツ経験	6.テニス教室参加以前のスポーツ経験
				過去(学生時代)	現在			
1	T・I	42	なし	なし	テニス ジョギング	中2長男 サッカー 小5次男 //	なし	なし
2	R・H	47	パート	バレ	ゴルフ	25歳長女 なし 23歳次女 エアロビクスダンス	//	//
3	K・S	43	//	テニス	テニス	高2長男 なし* 小6長女 テニス	//	//
4	S・M	34	なし	陸上	ゴルフ	中1長女 軟庭 小3長男 スイミング	バレ一操	//
5	K・A	34	パート	野球・柔道	なし	中1長男 小林寺拳法 小4次男 //	陸上	//
6	M・K	33	なし	なし	ソフトボール	小4長女 なし* 小2長男 サッカー	バスケット 軟庭	//
7	S・K	34	//	バレ	ゴルフ	小5長女 バスケット 小2次女 //	陸上	//
8	T・T	42	パート	なし	テニス ジョギング	高1長男 なし* 中2長女 水泳 小5次女 卓球	なし	卓球(1年)
9	K・T	45	//	//	ゴルフ	大1長女 バスケット 高2次女 バレー	//	卓球(継続)
10	S・I	35	なし	//	山歩 狩 歩 ぎ 猟	小5長男 スイミング 小1次男 なし*	//	スイミング (1年5ヶ月)
11	K・H	45	//	ラグビー	ゴルフ	高3長男 剣道 高1長女 //	//	ジョギング(継続)
12	M・K	34	//	水泳	なし	小3長男 スイミング 小2次男 //	ソフトボール 卓球	ソフトボール(1年)
13	Y・I	34	//	なし	テニス		弓道	弓道(継続)
14	M・T	43	//	バスケット	ゴルフ	中3長男 陸上 中2次男 卓球	なし	テニスS(6ヶ月)
15	N・N	43	//	軟庭	//	中1長男 柔道	//	軟庭(1年) 卓球(6ヶ月)
16	M・S	36	//	なし	アスレチック クラブ	小3長男 サッカー、スイミング 小1長女 スイミング	//	テニスS(1ヶ月) スイミング(1ヶ月)
17	K・O	36	パート	陸上 ゴルフ	ゴルフ	小6長女 軟庭 小5次女 //	//	テニスS(3ヶ月)
18	K・W	39	なし	なし	//	小6長男 なし 小5次男 なし 小2長女 なし	//	テニスS(4ヶ月)
19	I・I	38	//	空手	テニス	小3長男 サッカー、スイミング 小1長女 スイミング	//	テニスS(3ヶ月)
20	Y・K	39	//	野球 サッカー	テニス ゴルフ		//	テニス(1年継続)
21	T・K	37	//	なし	野球	小4長男 空手	ソフトボール	テニス(半年継続)
22	Y・I	34	//	野球 テニス	テニス ゴルフ	小4長女 スイミング 小1長男 //	バスケット	テニス(継続)
23	K・K	39	//	陸上	ゴルフ	高1長女 なし* 中1次女 スイミング	バレ	テニス(継続)
24	S・S	35	//	サッカー	テニス ゴルフ	小4長女 バレー 小2長男 サッカー、スイミング	バスケット	テニス(継続)
25	R・N	32	//	テニス	テニス	小1長女 スイミング 5歳長男 //	バレ	テニスS(3ヶ月)
26	T・M	34	パート	登山	テニス 山登り	小2長女 スイミング 6歳次女 //	乗馬	テニス(継続)
27	K・H	39	//	サイクリング	スイミング	小2長女 スイミング 6歳長男 //	なし	なし
28	T・S	36	なし	バレ	バレ	小4長女 バレー 小2長男 ソフトボール	//	//
29	Y・S	45	自営業 手伝い	ラグビー	ゴルフ	大2長女 なし* 高3次女 なし* 高1長男 ラグビー	軟庭	//
30	T・Y	35	なし	なし	テニス	小1長男 サッカー 4歳長女 なし	卓球	//
31	A・T	47	//	柔道	なし	21歳長女 なし* 中2長男 ハンドボール	なし	3B体操(3年)
32	S・N	45	//	ラグビー	//	高2長女 バスケット 高1次女 乗馬	//	バドミントン(2年) ジャズダンス(2年)
33	M・K	34	//	バスケット 野球	//	小2長女 スイミング 10ヶ月次女 なし	バレ	スイミング(6ヶ月)
34	K・T	36	//	なし	なし*	中3長女 なし* 中1次女 軟庭 5歳三女 なし	//	バレ(6年)
35	C・T	47	//	テニス	テニス	20歳長女 なし 高1長男 なし*	なし	テニスS(3ヶ月)
36	Y・N	40	パート	野球	ソフトボール ジョギング	中3長女 バスケ 中1次女 なし* 小4長男 剣道	バレ	テニスS(3ヶ月)

付表2 テニスの継続化についての調査結果(その2)

対象者 No	氏 名	7. 練習場所		8. 練習仲間	9. 練習形態	10. 試合出 場経験	11. テニ ス関係 の支出 (月額)	12. テニス技 能の向上度 (自己評価)	13. テニス(教室) の 効 果	14. 今後のス カ リ テとの わ	15. テニスのための条件			16. 行 動 意 図	17. 規範 信念		
		自宅からの 所用時間 (分)	場所								仲間	時間	場所		費用	家族	友人
1	T・I	K	自動車	5	教室, 夫	自主グループ	なし	2,000	少 し	楽しさ	楽しさ	有	有	有	高	高	高
2	R・H	K	自転車	15	教室, 友人	"	"	"	かなり	体調・友人	"	"	"	"	"	"	"
3	K・S	M	徒歩	5	クラブ員	地域クラブ	あり	1,200	"	ストレス解消	試合出場	"	"	"	"	"	"
4	S・M	K	自転車	10	教室, 近所の人	自主グループ	"	2~ 3,000	"	体 調	楽しさ	"	"	"	中	中	中
5	K・A	"	自転車	7	教室, 友人	"	"	3~ 4,000	少 し	体 調 ストレス解消	試合出場	"	"	"	高	高	高
6	M・K	"	自転車	3	"	"	"	3,000	かなり	体 調	"	"	"	"	"	"	"
7	S・K	"	自転車	5	"	"	"	10,000	"	健康・友人	"	"	"	"	"	"	"
8	T・T	J	自転車	15	クラブ員	地域クラブ	なし	1,200	少 し	体 調	"	"	"	"	"	"	"
9	K・T	N	徒歩	3	夫	なし	"	-	"	体 調 ストレス解消	楽しさ	"	"	"	低	中	中
10	S・I	D L	徒歩 自転車	2 10	団地内の人 スクールの人	団地クラブ 民間スクール	"	5,300	"	特になし	"	"	"	"	高	高	高
11	K・H	E	自転車	12	クラブ員	地域クラブ	"	6,000	"	体 調	試合出場	"	"	"	"	"	"
12	M・K	O A	自転車 バイク	5 5	教室, 友人 クラブ員	自主グループ 地域クラブ	あり	1,500	"	活 動 性	"	"	"	"	"	"	"
13	Y・I	K	自動車	30	教室, 友人	自主グループ	なし	5,000	"	体 調	楽しさ	"	"	"	"	"	"
14	M・T	C	バイク	5	教室, クラブ員	地域クラブ	あり	1,000	かなり	"	試合出場	"	"	"	"	"	"
15	N・N	K F	自転車 "	5 15	教室 クラブ員	"	なし	"	"	生活リズム	"	"	"	"	"	"	"
16	M・S	K L	自転車 "	10 15	友人 スクールの人	自主グループ 民間スクール	"	7,500	少 し	体 調	楽しさ	"	"	"	"	"	"
17	K・O	L M	自転車 "	10 3	スクールの人 クラブ員	民間スクール 地域クラブ	あり	5,000	"	精 神 力	試合出場	"	"	"	"	"	"
18	K・W	K P	自転車 自動車	10 30	教室 スクールの人	自主グループ 市スクール	なし	5,600	"	体 調	楽しさ	"	"	"	"	"	"
19	I・I	G K	徒歩 自転車	3 15	夫, 近所の人 教室	自主グループ	あり	700	かなり	楽しさ	試合出場	"	"	"	"	"	"
20	Y・K	K B	自転車 "	15 10	教室 スクールの人	民間スクール	"	6,000	"	健康・忍耐力	"	"	"	"	"	"	"
21	T・K	M Q	バイク 徒歩	5 5	教室, クラブ員 近所の人	地域クラブ 自主グループ	"	1,000	"	体 調 ストレス解消	"	"	"	"	"	"	"
22	Y・I	L R	自転車 "	20 15	スクールの人 クラブ員	民間スクール 地域クラブ	"	5,500	かなり向上	健 康 ストレス解消	"	"	"	"	"	"	"
23	K・K	C	自転車	20	教室, クラブ員	地域クラブ	"	1,000	"	体 調 思いやり	"	"	"	"	"	"	"
24	S・S	K K	自転車 "	4	教室 クラブ員	"	"	5,000	"	積 極 性	"	"	"	"	"	"	"
25	R・N	L G	自転車 徒歩	17 3	スクールの人 夫, 近所の人	民間スクール 自主グループ	"	"	"	体 調	"	"	"	"	"	"	"
26	T・M	S	自転車	30	夫, 友人	自主グループ	なし	1,500	少し向上	友 人	楽しさ	"	無	"	低	低	低
27	K・H	K	自転車	10	教室	"	"	-	あまり向上し なかった	体 調	-	"	"	無	"	"	"
28	T・S	K J	自転車 "	10 15	教室 クラブ員	自主グループ 地域クラブ	"	-	少し向上	ストレス解消	-	"	有	有	"	"	"
29	Y・S	K	自転車	5	教室	自主グループ	"	-	あまり向上し なかった	楽しさ	-	無	無	無	"	"	"
30	T・Y	J	自転車	8	クラブ員	地域クラブ	"	-	少し向上	友 人	-	有	"	"	"	"	"
31	A・T	-	-	-	-	-	-	-	あまり向上し なかった	気分よし	-	"	"	"	"	"	"
32	S・N	-	-	-	-	-	-	-	"	特になし	-	"	有	有	"	"	"
33	M・K	-	-	-	-	-	-	-	"	体 調	-	無	無	無	"	"	"
34	K・T	H	徒歩	3	教室, 近所の人	自主グループ	なし	-	少し向上	友 人	-	有	"	"	中	中	中
35	C・T	K	自転車	15	教室	"	"	-	あまり向上し なかった	楽しさ	-	"	"	低	低	低	
36	Y・N	K	自転車	10	"	"	"	-	"	体 調	-	"	"	"	"	"	"

付表3 スポーツ行動診断検査結果

対象者 No	氏 名	1. スポーツ意識の変化									2. スポーツ意識 総合判定の変化		
		態 度			信 念			規 範 信 念			昭和 60年	昭和 61年	昭和 62年
		昭 60 年	昭 61 年	昭 62 年	昭 60 年	昭 61 年	昭 62 年	昭 60 年	昭 61 年	昭 62 年			
1	T・I	高	高	—	中	中	—	高	高	—	E'	E'	—
2	R・H	低	高	高	低	中	中	中	中	中	C''	C'	C'
3	K・S	高	中	中	低	低	中	中	高	高	C'''	D'	DE
4	S・M	中	中	中	中	中	中	高	高	高	DE	DE	DE
5	K・A	高	高	高	高	高	高	中	高	高	C'''	E	E
6	M・K	高	高	高	中	中	高	高	高	高	E'	E'	E
7	S・K	中	高	高	中	高	中	高	高	高	DE	E	E'
8	T・T	中	高	高	中	高	中	高	中	高	DE	C'''	E'
9	K・T	中	高	中	低	中	低	中	低	中	C''	B'	C''
10	S・I	中	高	高	低	低	低	低	低	高	A'	AB	DE
11	K・H	高	高	高	中	高	低	高	低	中	E'	B	C'''
12	M・K	高	高	高	中	高	中	高	高	高	E'	E	E'
13	Y・I	高	高	高	中	中	低	高	高	中	E'	E'	C'''
14	M・T	中	中	中	低	低	低	中	高	中	C''	D'	C''
15	N・N	中	中	高	中	高	高	高	高	高	DE	E'	E
16	M・S	—	高	中	—	中	低	—	高	高	—	E'	D'
17	K・O	中	高	高	高	中	高	高	高	高	E'	E'	E
18	K・W	高	高	高	高	高	高	高	高	中	E	E	C'''
19	I・I	高	中	高	中	中	中	高	高	高	E'	DE	E'
20	Y・K	高	高	高	低	中	高	低	低	低	AB	B'	B
21	T・K	中	高	高	高	高	中	高	高	高	E'	E	E'
22	Y・I	中	高	—	低	低	—	高	高	—	D'	DE	—
23	K・K	高	高	中	中	中	中	中	高	高	C'	E'	DE
24	S・S	高	高	高	高	高	高	高	高	高	E	E	E
25	R・N	高	—	高	中	—	高	高	—	高	E'	—	E
26	T・M	高	高	中	中	中	中	高	高	高	E'	E'	DE
27	K・H	高	中	中	低	中	低	中	低	低	C'''	AB	A'
28	T・S	高	高	—	中	低	—	高	中	—	E'	C'''	—
29	Y・S	中	中	中	低	低	中	中	高	中	C''	D'	C
30	T・Y	高	中	中	低	低	中	高	高	高	DE	D'	DE
31	A・T	中	中	中	中	中	中	高	高	中	DE	DE	C
32	S・N	中	—	—	中	—	—	高	—	—	DE	—	—
33	M・K	高	中	—	低	低	—	中	低	—	C'''	A'	—
34	K・T	中	—	—	低	—	—	低	—	—	A'	—	—
35	C・T	高	高	高	中	中	中	高	高	高	E'	E'	E'
36	Y・N	高	高	高	低	中	中	高	高	高	DE	E'	E'

《備考》

付表1.

- 3. なし\*：以前は実施していたことを示す。
- 4. なし\*：以前は実施していたことを示す。
- 6. テニスS：テニススクール。  
(継続)：テニス教室参加時期まで継続。

付表2.

- 8. 教室：テニス教室参加者。
- 14. 試合出場：試合に出場したい、勝ちたい。  
楽しみ：試合に出たいとは思わない、楽しみたい。
- 15. 時間 有：とれるほう  
無：とれないほう  
場所 有：決まっている  
無：決まっていない  
仲間 有：いる  
無：いない
- 16. 17. 1週間以内の行動意図と規範信念。

付表3.

- 1. スポーツ意識の判定は  
高：3  
中：2  
低：1
- 2. スポーツ意識は、E, D, C, B, Aの順で高い。その他は準典型と混合型。